

キウイフルーツ果実軟腐病の伝染源の解明とこれに基づく防除対策に取り組んだ。

- 1.各地域における本病の発生状況を調べたところ,いずれの地域の果実も本病に高率に罹病していることが分かった。
- 2.粗皮の近く位置に着生している果実の方が,粗皮から離れた位置に着生している果実より明らかに発病程度が高かった。また,粗皮に近い果実と離れた果実の病斑から同様の割合で *Botryosphaeria* sp. と *Phomopsis* sp.が検出された。
- 3.温室及び常法によるいずれの検出方法でも,粗皮から *Botryosphaeria* sp. と *Phomopsis* sp.がやや高率に検出された。
- 4.*Botryosphaeria* sp. の孢子大量形成をクチナシ葉を用いた寒天葉片法で行ったところ,多量の孢子が形成された。
- 5.粗皮から検出された *Botryosphaeria* sp.の菌株は,暗灰色(検出頻度 80%)と不透明黒色(同 20%)の 2 種類であった。これらの菌株は,いずれも果実に対して強い病原性を示した。また,粗皮から検出された *Phomopsis* sp.の菌株は,濃紫色(同 60%)と薄桃色(同 40%)の 2 種類であった。濃紫色の菌株は強い病原性を示したが,薄桃色の菌株の病原性はやや弱かった。
- 6.手作業による粗皮けずり及び剪定痕へのトップジン M ペースト塗布処理は,明らかに本病の発生を抑制した。効果は 3 年間継続した。また,粗皮けずり処理のみでも本病の発病抑制効果が認められた。樹勢の低下は見られなかった。
- 7.粗皮けずり機(バークストリッパー)を用いての粗皮けずり及び剪定痕へのトップジン M ペースト塗布処理は,明らかに本病の発生を抑制した。効果は 2 年間継続した。樹勢の低下は見られなかった。処理区では無処理区に比べて,*Phomopsis* sp.の検出率が低い傾向が見られた。また,粗皮けずり処理によりクワシロカイガラムシの被害が減少する傾向が見られた。
- 8.皮目を温室状態に置いて *Botryosphaeria* sp. と *Phomopsis* sp.の柄子殻の形成は認められなかった。常法による菌の検出では,*Botryosphaeria* sp. は検出できなかったが,*Phomopsis* sp.はやや高率に検出された

キーワード:キウイフルーツ果実軟腐病,伝染源としての粗皮,粗皮けずり